

寄稿

ふるさとの歴史文化を活かした 里づくり

宮城県栗原市 富野地域づくり協議会

会長 齋藤 義憲

私たちの住む栗原市は、栗駒山から豊かな水が潤す米どころであり、宮城を代表する穀倉地帯である。稲束が干ざれている「ほんによ」は日本の原風景であるがそれが消えつつある。

平成20年、23年の二度の大震災では最大震度地点となった。内陸地震では日本最大級「荒砥沢ダムの上流崩壊地」が形成され、栗駒山麓の地形や景観が学術研究にとジオパークに認定された。ダム崩壊により不足する用水量を確保するため、ダム地点より35キロ下流の富野地域まで水を引き「荒砥沢ダム代替調整池」(東京ドーム3個分)が造られた。富野地域は戸数290戸、人口840人。地域には4本の川が流れ四つの集落が点在する。

I. 本会の設立の経緯

平成27年に富野小学校が閉校し、子どもたちは四つの学校に通学することになった。これまで小学校と地域で連携してきたふるさと学習や学校行事の鶏舞神楽の伝承、農業体験が消え地域の将来を担う子どもたちに、地域の歴史や伝統文化をどうつなぐか、そして、地域内で互いに顔を合わせる機会もなくなり四つの集落の一体感も薄れてしまうなど課題となった。

そこで旧小学校区の全行政区による「富野



閉校式に小学校最後の「鶏舞」を舞う子どもたち
閉校により城生野神楽の鶏舞がなくなると心配していた子どもたち。これまで東北博覧会や「子ども通信国際会議 in みやぎ」で、国際文化交流などで披露し絶賛された鶏舞神楽を、次世代につなぎたいと、保護者会を結成し「城生野神楽鶏舞クラブ」が誕生

地域づくり協議会」を設立し、地域の宝を掘り起こし、生まれ育ったふるさとへの誇りと愛着の醸成、魅力ある里づくりを目指して取り組むことにした。

II. 地域の宝を掘り起こす

今から1250年前に国家統一のためエミシ支配の最前線基地「伊治城」は、異説があり「幻の城」と言われていた。地元の住職は「幻

の城」この地にあると、大正期から全地区民に遺物収集を呼び掛け、昭和50年まで760点収集し出土品を寺の本堂に展示した。

この遺物により教育委員会の発掘作業が始まり平成4年に政庁跡が解明され、平成15年「伊治城跡」は国史跡となった。こうした先人のふるさとへの思いや誇りを語り継ぐとともに、地域に眠る貴重な宝を掘り起こしガイドブックにまとめ、地域の宝を活かし次世代に継承する里づくりを目指している。

Ⅲ. 魅力ある里づくりを目指して

地域の宝を地域住民が共有し、地域に住むことへの愛着と誇りを育み「住んでよかった」「ずっと住み続けたい」と実感できる里、地域外の人々が「訪ねてみたい」と実感できる魅力ある里づくりを目指し、「知り・伝え・つなぐ」をキーワードにして各活動に取り組んでいる。

- ①古里伝承活動（歴遊ロマン健康ウォーク、城生野神楽鶏舞の伝承）
- ②健全育成活動（古代米づくり体験、歴史探検ウォークラリー）
- ③ふれあい活動（富野地区ふれあいまつり、富野地区文化祭）
- ④防災防犯活動（地区ごとに合同避難訓練や見守り隊）

⑤健康福祉活動（地区ごとに元氣アップ体操など）

これらの活動で、①②③の活動名の前に「これはりの里」と付している。これは、地域住民は、昔から国史跡となった城名を「伊治（いじ）城」と呼んできたが、多賀城で漆紙文書出土により、昭和53年「伊治（これはり）城」と解読されたからである。

「伊治城」は、栗原の地名の原点でもあり、栗原の歴史を後世に伝承するには城名の読みを「伊治（これはり）城」とおさえ、本会の活動名の前に「これはりの里」を付し城名普及に取り組んでいる。

Ⅳ. 地域の宝を知り・伝え・つなぐ

1. 歴史文化ロマンの「これはりの里」

(1)地域の宝を巡る「これはりの里」歴遊ロマン健康ウォーク

このコースには、「伊治城跡」と、国道4号線バイパス工事中に発見され、平成29年国史跡となった古墳前期の集落「入の沢遺跡」が含まれる。また、国内陸最北端の古墳、前9年の役古戦場跡、鹿島神社と鹿島堰、二社の式内社跡、明治天皇東北御巡幸御小憩地、荒砥沢ダム代替調整池など掘り起こした地域の宝の歴史を巡る9キロコースと4キロコースの2コースを設定した。地域内には指定文化

財の看板と標柱一本だけ立つ地域であるが、このコースを散策し、当たり前前の風景に隠れていた歴史資源の多さに驚いていた。この豊かな資源の魅力を再認識し、誇りや愛着心が高まり地域の活性化につながっている。

(2)地域の宝の鶏舞神楽の伝承

①城生野神楽鶏舞クラブの誕生

地域の宝である鶏舞神楽は、昭和48年から学校行事に取り入れられ、家庭・地域・学校の絆を深める大きな役割を果たしてきた。城生野神楽は、今から400年前、栗駒山麓の白鏡山で富助が鶏舞神楽を習得し城生野神楽を創設。また岩手県南・宮城県北地方には娯楽性の高い南部神楽が伝承されている。

この地方の神楽は地域の連帯意識、郷土愛、古里への誇りを醸成する一翼を担う地域コミュニティの象徴でもあった。学校閉校により神楽の伝承活動が消えつつあった。閉校記念式の最後の舞で「何時までも神楽を継いでいきたい」と強い子どもたちの声があがり、地域の誇りである伝統神楽を地域で育て次代につなごうと、子どもたちの城生野神楽鶏舞クラブを結成、毎週1回若手指導者のもとで子どもたちは練習に励んでいる。

②同世代・異世代交流の「これはりの里」神

楽伝承まつり

栗駒山麓の自鏡山を源流とする神楽を伝承している岩手県南・宮城県北地方の奥州・平泉・一関・栗原・大崎・登米市町の各神楽団体は、神楽が消えつつあると同じ悩みを抱えていた。

そこで、本会では子どもたちの交流・連携の場、発表・鑑賞の機会がないので、一町五市の子どもの同世代・異世代交流ができる場を設定し、神楽の復興を図りたいと各神楽団体に相談し、全日本郷土芸能協会の復興活動支援を受け神楽伝承まつりを開催してきた。その後甚句や和太鼓、八鹿踊りなどの市内の民俗芸能団体も加わり開催し、これ



神楽の同世代・異世代交流の伝承まつり

子どもたちの神楽の交流の場がないと岩手県南、宮城県北地方の神楽団体は同じ悩みを抱えていた。そこで、子どもたちの舞いと大人の舞いが見られる交流を図る神楽の伝承まつりとした。せりふ神楽の南部神楽もあり奈良女子大学の3人の先生方も見えた。

まで本市では子ども神楽1団体、他市で1団体増えた。

三菱UFJ信託地域文化財団には、これまでの本会の民俗芸能活動を評価して頂き、器材購入の助成を受け、今後「伝統芸能フェスティバル」と名称変更し開催することにした。

③地域の歴史を神楽で伝える（創作神楽「伊治城物語〜宝亀春の夜嵐〜」）

今から30年前、鎌倉在住の神楽研究家の佐藤正行氏（栗原市出身）が「伊治城物語」の脚本を書き下ろしたことを知り、監修をNHK BS「英雄たちの選択」で古代東北の歴史を解説した東北学院大学名誉教授熊谷公男先



神楽で伝える地域の歴史「伊治城物語〜宝亀春の夜嵐〜」

伊治城は律令国家と蝦夷との最北の軍事拠点。さらに北進し胆沢の地を獲得する政策に、780年3月蝦夷出身の伊治公皆麻呂（これはりのきみあざまる）は、伊治城付近に視察に来た按察使紀広純（あぜちきのひろずみ）を殺害。「皆麻呂の乱」により律令国家と蝦夷との38年戦争の幕開けとなった。これを描いた創作神楽

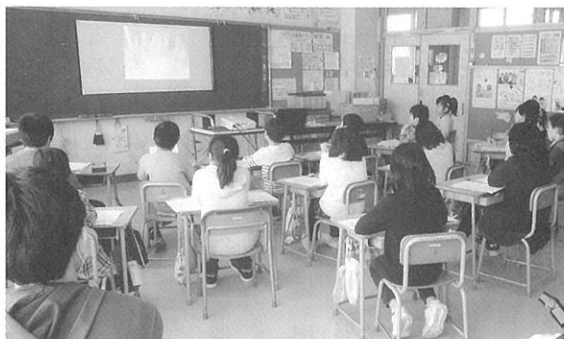
生にお願いした。脚本をもとに城生野神楽のメンバーは1年間の練習を積み重ね、「伊治城築城1250年記念」に発表した。若手の舞手の声（こわ）とダイナミックな舞いに喝采を得た。大震災による三陸地方の被災地への訪問、宮城県人会東京支部からの招待、令和元年から東北神楽大会、岩手県南・宮城県北神楽大会、みちのく神楽大会などで演じ連続優勝など、ふるさとの歴史を神楽で伝えていく。

2. 学校を核とした里づくり

学校を核として地域の宝を活かした「ふるさと体験」により、ふるさとの歴史文化を理解し愛着を深めるとともに、地域に誇りをもつ人材育成を図りたいと活動している。この活動を通して子どもと大人が共に学び合い育ち合うコミュニティづくりを目指している。

(1) 「これはりの里」歴史探検ウォークラリー

地域の宝を子どもたちが通う小学校の4年生以上を対象に、友達同士・親子同士などのグループで競うウォークラリー。4キロコースの歴史ポイント10地点の問題を、資料をもとにグループで解き、その正答数と各チームの平均タイムとで順位が決まる。クイズを解きながらふるさとの歴史を楽しんで学べる。子どもたちや保護者には大変好評である。



小学校での郷土学習の出前授業
 小学年での郷土学習では、学校近くの皇代神社の入口にある神社の祭神【天照大神】の大きな石碑の学習だった。そこで授業では、「天照大神」と「国の始まり」について動画で学習、国の始まりには神楽の鶏舞の由来を動画で学習、子どもたちは神社にある石碑や神楽の由来がよく分かったと喜んでた

(2)「これはりの里」古代米づくりと食体験

栗原の里は仙台藩で石高第1位を占めた「豊穡の地」であったことから、栗原市のマスコットキャラクターは「ねじりほんによ」である。古代米づくりの田植えでは田下駄体験や田んぼアート、稲刈りでは石包丁体験、「ねじりほんによ」体験を組み入れている。体験の最後には参加者一同で食体験があり、収穫した古代米は子どもたちの手元に届く。収穫の喜びや働く喜びを味わい、一人でも農業の担い手づくりにつながればと願っている。

(3)学校で「ふるさと学習」の出前授業

学校の子どもたちを対象に、昔のお正月行

事や史跡、地域の神社や神話（動画）などの学習の出前授業を行っている。史跡や神楽、民話などに子どもたちは興味をもって学習に臨んでいる。

3. 地域のつながり・支え合いの里づくり

(1)夏のお盆の「これはりの里」ふれあい祭り

昔、盆踊りで賑わったように盆の15日は、帰省客を入れた富野地区民のふれあい交流の場である。歴史コーナーを設け、伊治城政庁1/100模型（会作成）や、昔の懐かしい写真の展示もある。子どもたちの鶏舞神楽からスタートし、各地区から歌やコーラス、踊りやダンス等の出し物で大きな拍手が会場いっぱいにあふれてお盆のひとつを懐かしむ。

(2)秋の「富野地区文化祭」

11月第3土・日曜の2日間は「地区民による地区民のための地区民総参加の文化祭」のキャッチフレーズで文化祭を開催している。子どもから大人までの手づくりの作品は、毎年500点を超える。歴史文化展コーナーでは、栗原郡の黎明期・形成期展、令和元号と国の始まり、アニメで日本神話の視聴など。毎年市内外から多くの来訪者がある。

(3)互近助（こきんじよ）「ネットワークの防災安全活動」



文化祭での「城生野神楽」の歴史コーナー
 毎年の文化祭では「城生野神楽」コーナーを設けている。城生野神楽では、庭元に保存している神楽衣装、面などが文化祭で初公開した。特に古い時代の面や神楽台本などの展示には、多くの方々興味深く魅入っていた。



栗原郡誕生1250年を祝し「くり花」（1250個）飾り
 769年6月、陸奥国栗原郡が置かれた。令和元年（2019）で栗原郡誕生1250年を迎えた。根岸地区つるし飾りサークルでは、誕生1250年を祝し富野地区文化祭に「くり花1250個」をつくり飾った。文化祭終了後、栗原市長室に飾られた。

平成27年9月に関東・東北豪雨がおり、本
地域を流れる4本の川が決壊し国道4号線が
不通、3集落には避難勧告が出て旧小学校体
育館に避難した。本会の連絡網により避難者
受け入れ、孤立集落の支援などの対応が手早
くでき人身被害もなかった。地域コミュニテ
ィの防災のまちづくりは「互近助」のネットワ
ーク体制が非常に重要であることを確認した。

4. 新たな地域の魅力を再発見

令和2年、地域内に新たな地域の宝を掘り
起こし、学び合い、ウォークも実施した。

○8月・黒瀬地区では「むかしむかしのこの
へんのお話」と題して、安永7年「風土記
御用書出」を引用し、約250年前と現在
の暮らしを学び合った。

○9月・城生野地区では、明治以後「てんの
うさま」の祭神がスサノウ神となり、八幡
神社相殿の事実が判明したことにより、約
150年ぶりに二神を祀る例大祭を開催し
た。

○9月・根岸・富地区では、国内陸最北端の
古墳群横の梵字碑等の拓本取り体験。

○10月・9月の拓本取りをもとに、歴史を伝
える石碑・遺構の散策、内陸最北端の古墳
と疫病退散の守護神の「梵字碑」と「八王
子碑」のウォークを開催。

○11月・地域研修では「伊治城」が定説となっ

た先人が収集した出土品展示の栗原市築館
出土文化財管理センター見学と「栗原郡長
伊治公咎（あざ）麻呂の乱」の歴史研修。

V. 次世代に歴史文化を 引き継ぐために

1. 市教育委員会では、文科省に国史跡「伊
治城」の申請時に地元で根強い城名「イジ」
とルビを振り、「コレハリ」も有力として二
通りの読みで説明している。本会では栗原



黒瀬地区の「むかしむかしのこのへんのお話」
黒瀬地区の松寿会では、昔からの民話や伝説、言い伝えなど、昔の生活の様子を
学び合った。この地に生まれ育ち、これまで知らなかった歴史・文化資源を再発見し、
地域の魅力に気付いた方も多かった。次世代に語り継いでいこうと話し合った

の地名の原点である史跡への愛着を育み知
名度を上げたいと「コレハリ」と一つの読
みで、城名普及に取り組んでいる。高校教
科書でも、「これはり」と一つの呼名を確認
している。平成29年は築城1250年にあ
たり、神楽で栗原郡長官「伊治咎麻呂」を
描いた創作神楽を発表。令和元年の栗原郡
誕生1250年では、日本神話を神楽での
舞を企画実施。二つの記念行事でのウォ
ークやウォークラリー参加者には「認定証」
を発行し喜ばれた。



岩手県「志波城跡」史跡研修
毎年、伊治城に関連する史跡や資料館（宮城・岩手・秋田県内）の企画展・特別
展など見学し、歴史を学びながら先人が残した歴史・文化資源をどのように生か
しているか話し合い、本会活動に参考にしたいと研修している



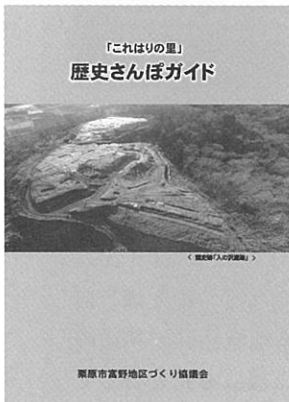
地域のみんでふるさと体験「お幣束づくり」

お正月になじみあるお幣束、鶏舞神楽の舞手が持つお幣束を頂くと御利益があるという言い伝えがある。毎年子どもと共に大人も一緒に取り組むお幣束づくりの体験は、子どもは大人から学び、教えることで大人も学ばされ、共育によるコミュニティの活性化になっている

令和2年度大学入試センター試験には「伊治城」「伊治皆麻呂」が出题され、地域住民は史跡の歴史的価値の高さに誇りを感じている。

2. ふれあい部のふれあい祭りと文化祭では、地域の担い手の養成のため実行委員会を立ち上げて開催している。次世代の継承を支え合う人づくりやコミュニティの基盤の活性化を図り、さらに魅力ある元気な里づくりを目指したい。

3. ふるさと体験では、子どもと大人が共に体験することで、子どもは地域の大人から学び、教えることで大人も学ぶ、共育によ



「歴史さんぼガイド」編集 (24頁) 地域の宝を掘り起こし、「富野地域ふるさと40景」にまとめたガイド集。二つの国史跡と式内社、国内陸最北端の古墳群、日本初「髻」の出土、正倉院に次ぐ藤手刀出土、明治天皇御小憩地、民話・伝説、皆麻呂の乱と城生野神楽の伝承など紹介



「ふるさと歴史さんぼ道」編集 (家庭版) (40頁) 「富野地域ふるさと40景」をコンパクトにしたガイド集と、これまで古代伝承活動・健全育成活動・ふれあい活動で取り組んできた内容を加えた冊子。家族や親戚の方々に、先人が残した「歴史ロマンの里」を次世代に伝え・つないでほしいと地区内全家庭に配布

るコミュニティの活性化になっている。

4. 地域住民がふるさとへの学びにより、地域の魅力を見つめ直し、新たな地域の宝を掘り起こし磨きをかけ、地域の宝を共有し、守り伝え・つなぐ機運が高まっている。

5. 令和元年は栗原郡誕生1250年にあたり、東京の神社本庁より「国の始まり」「お祭りとお米」「元号って何だろう?」の冊子各2500冊が寄贈された。本会の活動に参加した全員に配布したが、全冊完配できずほど年間の来訪者になっている。

6. 子どもに地域への愛着や誇りを育み、地域の将来を担う人材の育成は、「学校を核と

した地域づくり」が大切である。本会では、子どもの学びの支援と地域づくりをさらに充実することにより、ふるさとへの愛着心が育まれ、子どもたちが「我がふるさとのよさ」をどこに行っても話れる人づくりを目指したい。



「伊治城築城1250年」の祝賀会

2017年には築城1250年を迎え、新年会を兼ね城生野神楽の舞と謡などで築城祝賀会を開催。先人が伝えてきた地域の宝を守り・伝え・つなぐ「これほりの里」づくりにより地域の活性化を図りたいと「いよーお」という大きな掛け声と拍手に会場が沸いた